

長谷の音

豊山声明

真言宗豊山派総本山
豊山神楽院

長谷寺

文中島敬介

《仏教儀礼と声明》

「漢字」の音読みには数種あって、ややこしい。シルクロードがイメージされる「西域」は一般に「さい・いき」と読み、「せい・いき」とは言わない。後者を口にする、多くはサンクチュアリの「聖域」を連想するだろう。孫悟空が活躍する「西遊記」も「さい・ゆう・き」であって、「せい・ゆう・き」ではない。「西」の「せい」は漢音、「さい」は呉音の読みである。大雑把に言えば、後者の呉音は、漢音が制度的に導入される7〜8世紀以前からこの国に定着していた読み方で、仏教用語としてはこちらが多く使われている。例えば、「聖観音」も「しょう・かんのん」で、「せい・かんのん」とは呼ばれない。

同様に仏教世界の「声明」も、主張や訴えを公言する漢音の「せい・めい」とは区別されて、呉音で「しょう（しゃう）・みょう」と発音される。もちろん、「明」を唐音で「みん」と呼ばれることもない。

この「声明」は、もともとインドの五大学術（「五明」）の一つで、「バラモン教」という宗教の経典の読み方を研究する学問、発音学・音韻学¹⁾を

指した。これが中国で「声明」と訳されて、日本に入ってきたのである。

この学問研究である「声明」とは別に、仏教の儀礼音楽も中国・韓半島を経由して伝わり、日本では「梵唄・讚」と呼ばれて、6世紀中期の仏教公伝以来、法会や法要の機会に朗誦されてきた。いったん、経典の読み方の研究と朗唱の実践に分かれた両者は、13世紀の初めに縫りを戻す。この時期、天台宗の僧侶・湛智（1163-1237ごろ）が、『声明用心集』を著し、雅楽の理論も盛り込んで、従来の古風な唱法（「古流」）に対峙する新しい仏教楽理（「新流」）が構築された。この湛智の『声明用心集』が出る「前後から『声明』という語が広まった」とされ、『声明』という語を仏教儀式音楽の意味に用いているのは日本だけ」とも言われている²⁾。

このような事情が影響しているのか、厳格な仏教辞典類には、「シャウミヤウ声明」の項には「五明の一」としか載せられていないものがある³⁾。やや柔軟に幅広く語彙を収録している『仏教語大辞典』⁴⁾でも、「【声明】しようみょう」は、まず「音声・言語の学問。五明の一」と定義され、仏教音楽としての「声明」は、第2の異なる意味として説明されている。

儀式に用いる讚詠。節をつけて経文を諷頌すること。梵唄（ほんばい）ともいう。経文のうちの偈頌（げじゆ）（詩歌）を昇降・屈曲の節をつけて仏前で朗誦すること。わが国では平安時代ごろに真言宗と天台宗とがこれを伝来し、中期以後大に行われた。後、念仏や和讃が流行するにつれて、おのずから音節の変化があった。わが国の声楽の根源となっている。「…」⁵⁾

どうにも物足りなさを感じるのは、最後から2つめのセンテンスに接続されるべき説明が、次の「【声明家】しようみょうけ」に持ち越されているからである。

わが国において、仏教音楽である梵唄を研究・実習する系統の人びとをいう。「…」わが国の声明は顕密の二流に分かれ、洛外大原の地は天台宗の声明を伝え、洛北千本には真言宗の声明を伝えた。天台宗の声明は円仁を祖とし円珍以下数代を経て、良忍に及んで大成された。真言宗の声明は千本通の上品蓮台寺・大報恩寺・引撰寺などに伝えられ、広沢流の寛朝が最も有名である⁶⁾。

この奇妙な説明の分割は、あるいは良忍（大原〈天台〉）声明の完成者とされる）と寛朝（真言声明中興の祖とされる）の2人を、「声明家」としてフィーチャーさせたいからかもしれないが、一方でこの記述だけを読めば、両者は（そして円仁・円珍も一括りで）「梵唄を研究・実習する系統の人びと」と誤解されかねない。またここでの「声明」の記述は、先に触れた湛智の出現以前、すなわち仏教音楽の意味で「声明」という言葉が普及する前の時代で終わっている。アナクロニズムと文句をつけなくなるが、ぐっと抑えて本稿では、それ以後の「仏教儀式音楽である声明」（以下、これを「声明」という）の動向を探っていくことにしたい。

《声明の伝承が危ぶまれている!?!》

真言声明も天台声明も、『文化庁の国指定文化財等データベース』では、「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に分類されている。真言声明については、『辞典』末尾の「広さ流の寛朝」以降の展開を、次のように記述している⁸⁾。

寛朝よりしばらくして宗観が出て真言声明の声価を高からしめた。宗観を大進上人と呼んだので、その声明を「進流」という。この声明はその後、全国に普及するとともに、その曲節も乱れるに至った

ので、近衛天皇の頃、京都御室の覚性法親王は仁和寺へ真言声明を召集し、検討の結果、相応院流（本相応院流、新相応院流）、醍醐流、進流の四流に区分した。しかるに鎌倉時代中期に至り、高野山に進流を移したので、進流を「南山進流」ということとなった。

その後、正応年間に高野山の頼瑜僧正は勅許を得て紀伊国根来山に移り、南山進流と醍醐流とを合わせ研究して一流を開いた。これを

新義声明という。天正十三年根来山は豊臣秀吉の攻撃により焼亡し、その一部は大和の長谷寺に逃れて豊山派を開き、他の一部は京都に逃れて智山派を開いた。かくして真言声明は南山進流、新義豊山派、同智山派の三流が今日に伝えられている。

声明は各種の法会に唱えられるものであるが、近時次第に法会は往時のように十分に時間をかけて盛大に行うということが少なくなり、簡略化され、それに要したいろいろな声明が唱えられなくなり、声明の伝承が危ぶまれている。

一大事ではないか！よくも「声明の伝承が危ぶまれている」と澄ましているものだ。文化財を保護する立場とすれば、その先にこそ目を向けるべきではないか。何よりはっきりしていることは、「声明」だけが「ぼつん」と1つだけ消えることはあり得ない、ということだ。声明は「法会」につながり、法会は「信仰」に——分ちがたく——つながっているからだ。教義の理解と儀礼の実践は、表裏一体となって、信仰の成立を支えているのだ。と偉そうに言ってはみたものの、私は「声明」について何ほど知っているのか。そもそも仏教の声明は、キリスト教の讃美歌とどこがどれほど違うのか。ウィルス対策も万全に、私は豊山声明で名高い長谷寺に向かった

《長谷寺の声明（豊山声明）》

長谷のかたち（観音さま）と音（声明）

2021年5月末。ふだんなら参拝者で溢れかえっている三九九階段も、この日はかりはひっそりしていた。あらためて言うまでもないが、長谷寺は初瀬の山腹に建っている。だが、こうして階段を踏みしめて

いると、逆に長谷寺の塔や御堂や伽藍が、初瀬の山を造っているように思われてならない。

この寺の正式名称は「豊山神楽院長谷寺（ぶざん・かぐらいん・はせでら）」、真言宗豊山派の総本山である。創建は天武天皇時代である朱鳥元年（686）年とされる。そして、古来多くの人々を惹き付けてきた本尊・十一面観世音菩薩は、天平7年（735）に造立が始まり、天平19年（747）年に完成した。造立を願ったのは聖武天皇。あらゆる教えの中で「釈教（仏教）が最上」と言い、この世に起こる災害病苦、「その全ての責任は私ひとりにある」と言った、ちょうどその翌年に造立が開始され、東大寺盧遮那仏（大仏）の鑄造が始まった、ちょうどその年に完成している。東大寺の前身である「山房」を起点に、現在の二月堂東側での展開が構想された聖武天皇の「観音浄土空間」は、遙かこの初瀬の山の長谷寺まで広がっていたのである。

山房に込めたわが子への弔いは、やがて金鍾寺での民への「慈しみ」に、終には菩薩となって衆生を救う——救わないではいられない——東大寺の「悲の祈り」へと昇華した。「長谷の観音さま」（十一面観世音菩薩像）の右足が一步前に進み出ているのは、そのような「いたたまれない」ほど激しい「慈悲」の造形表現だとすれば、「長谷の音」（豊山声明）とは、その慈悲極まった音響表現と言えるかもしれない。

長谷寺の信仰の本質

少々お尋ねの本題からは離れてしまいますが。

ご対応いただいた長谷寺の僧侶は、申し訳なきように、そしてちょっと困った感じで、最初にそうおっしゃった。

当然の困惑だろう。申し訳ないのは当方である。「声明」のインタビューを申し入れたはずの人間が、大磐石（山の岩盤）に立つ「長谷の観音さま」から、一向に話題を移そうとする気配を見せなかったのだから。立場が変わって私なら、忙しいからとととと帰れと追い出すところ、長谷寺さんは優しくすべてを受け容れる。

私どもにとりましても、やはり「観音さま」は特別です。毎年10名ほどの学生（ほとんど20歳代）が、長谷寺で2年間の修行を志し、その後地元に戻るのですが、間近に拜ませてもらったうちに、自然に自分の心の拠り所になっております。自分という存在は、この観音さま無くしては成り立たないくらいの気持ちですね。ここ（長谷寺）で修行した者はばかりでなく、豊山派の僧侶は、みんな観音さまにそういう気持ちを抱いているのではないのでしょうか。

私どもは真言宗の僧ですから、本来なら大日如来さまがご本尊ですが、「長谷の観音さま」だけは特別です。

今も昔もたくさんの方々が心の支えとし、観音さまに救われているという歴史的事実を目の当たりにしていますから、困っている方、苦しんでいる方がいらっしゃれば何より観音さまにお祈りする。そういうふうには、私ども自身が観音さまにお頼りしているところがあります。

ご存じのように長谷寺は、江戸幕府が開かれる直前あたりに専管僧正（1530-1604）が入山され、今日の真言宗新義派のお寺になりました。観音さまの建立はもちろん、観音さまへの信仰も、そのずっと以前から途切れることなく盛んでした。そこに近世以降、真言宗の思想が重なりました。弘法大師（真言宗の開祖・

空海)が残された『十住心論』によれば、仏教の宗派だけでなく世界中のあらゆる宗教は、共通の水脈を持ち、対立することがない。全ては曼荼羅世界の中に包摂され、その根底(中心)にあるのが、真言宗の言葉で言えば大日如来さまです。私どもにとって「長谷の観音さま」は、大日如来さまであり、宗教の根幹である信仰そのものと言ってよいと思います。観音さまへのお祈りは、すべての仏さまへのお祈りになっていると思っております。

長谷寺における信仰は——そして、それは奈良の大神に共通する祈りの特徴かもしれないが——他者の否定の上に、あるいは既にあったものを塗り潰して成り立っているものではないのだ。

「声明は口伝です」

経典が成立する以前、インドでは、仏教教義は師から弟子に口伝されていました。口頭で伝える場合、現在でもリズムに乗せたり、メロディを付けたりしますが、当時もそのようになされるが多かったと思います。その「音に乗せてお釈迦様の教えをお伝えする」という口伝のスタイルが、中国を経て日本にも入ってきました。もちろん、インドのリズムやメロディそのままではなく、中国でも日本でも国に合った「音」に変わっていったと思います。「声明」という名称で呼ばれているかどうかはともかく、旋律をつけてお経を唱えるのは、中国や韓国でも行われています。

今の私たちの声明の学び方も、基本として口伝です。「面授(めんじゆ)」と呼ばれ、弟子はお師匠さまから一対一で教わります。まず、お師匠さまが「こうやってやるんだよ」と手本を聞かせる。それを弟子が真似をして唱える。お師匠さまが「そうじゃない、こうだよ」

東大寺の大仏さまの開眼供養では「四箇法要」の記録が残っていて、そこで「声明」が行われています。1270年も昔の出来事ですが、そのときの「音」が譜面で残されています。鎌倉時代、覚意という方が「五音博士」(博士とは西洋の音符に相当するもの)で、大仏開眼のときのものを含め、当時伝わっていた「声明」の音を、ほとんど全部採譜されています。

なんと、中世の鎌倉期の日本で譜面がつくられていたのか。

はい。おそらく印刷物として配布された楽譜としては、世界最古の部類に入ると思います。それが今日でも使える状態になって残っています。現に私たちは今日も、その譜面に従って「声明」を唱えています。それを可能にしているのは、当時既に、西洋音楽のハ長調・ト短調と同じように「調」が、きっちり決められていたからです。

「この曲は一越調で唱えてください。この曲は平調で唱えてください。この曲は双調です」という規定がありまして、「その調・この音」と指示されれば、今日でも実際に鍵盤で、(例えば「ラ」の音として)再現できるのです。私たちが授業で「声明」を扱う場合も、鍵盤で「ラ」を出して、この音から始めますと言えらるわけです。個々の練習を積み重ねれば、全体の音も合っていくようにできています。

ただ、西洋の音符とは違って、「その調・この音」が、「一音だけ」に限定されてはいません。いわゆる「絶対音」ではないのです。特徴的なのが「声の出し方」で、例えば西洋音楽での「ラ」の音は、最初から最後まで一貫して「ラ」の音だけですが、「声明」の場合は、目指す音が「ラ」なら、発声は少し下から出て、「ラァ」っていう

と指導してくださる。そういうかたちでの口伝です。

声明とは、仏教教義の師資相伝なのだろうか。

「面授」は教義の口伝ではありませんが、お経の文言が伝授されているというより、その文言に込められている「精神性」、あるいは唱える時の「心構え」、さらには仏さまの本質というものを教えていたいただきます。言い換えると、お経の趣旨・作法・心構えなども含めて、お師匠さまの全人格を弟子が受け継ぐ、その一部として「声(リズムやメロディ)」がある、という感じですね。

これが、この「面授」という口伝スタイルの優れたところだと思えますが、今の時代にあつては、「一対一」を貫くのはなかなか難しい。教室で大人数同時に指導することもあります。先生が1人いて、10人20人の学生さんが一緒に唱える。そのあとは、各々に対応して、個別に直していくこととなります。

経典の文言や解釈というよりは、その本質や意味が伝えられるということか。

そうですね。さらに申しますと、今日にあつては「声明」そのものの役割は、経典の内容を伝えるというより、「音による供養」という側面が強いのと思います。供養には、さまざまな方法があります。目に見えるかたちでお花やお供物を差し上げるだけでなく、「音を差し上げる」ことも、仏さまへのご供養となります。「声明」は、その音による供養の一つと考えられています。

「声」を合わせる

ところで、「声明」は口伝だけで継承されてきたのだろうか。

ふうに、上へ「しゃくり」上げる、あるいは「反り上げる」感じに発声することがあります。みんなが合わせられるタイミングまでの「遊び」の部分と言って良いと思います。人によって音の感覚はさまざまだし、若い方もいればお年寄りもいらっしやる。そういう多様な人たちが、最後に同じ音に到達できるように、一種の工夫が凝らされている、そのように言えると思います。

この他にも、例えば西洋音楽で言うブレス(息継ぎ)のところは、「切」と書かれますが、この「切」とは別に「切心」という指示もあります。「切」は「そこでブレスしてください」という意味ですから、当然息と同時に音も切る。一方「切心」は、「ここでは音だけ切つて、息は切らないでください」という指示です。

このように、「声明」には「間合ひ」の取り方を一様にせず、各個人に「間合ひ」を図る余地を与え、結果として、みんなで同じように唱えることができる、そういう工夫が随所に見られます。

それらの工夫は、「切心」のように指示として譜面に記されているのだろうか。

いいえ、譜面には記されていません。お師匠さまからの「面授」で学びます。「間合ひ」のタイミングも、多くはどこにも記されていません。テンポも基本的にフリーですが、これも譜面で一律に指示されるわけではありません。これらはどれも、「声明」の耳で伝承されていく部分です。

師から弟子への口伝だから、当然ながら師匠の「個性」が強く出るだろう。悪く言えば、教える人によって「まちまち」だ。個性は集団で唱える時の一体性を邪魔しないのだろうか。

長谷寺の毎日は、法要で始まり法要で終わります。普段からみんな「声明」を唱えていますので、大きな法要のときに大人数で唱えるときも、「合わせる」ことに意識することはありません。すごく自然に「合っていく」感じですね。

日常の法要で唱える声明は4〜5曲、大規模な法要では、多いときで25曲ほどに及びます。それぞれの曲ごとに、ソロをとる「頭(とう)」が決められ、他の僧侶は「助(じょ)」となってコーラスに回ります。実は各「声明」の音の高さや速さ(テンポ)を決めるのは、ソロの「頭」に当たった人なのです。

先に申しましたように、「声明」も西洋音楽のように、ある程度、音や調子は定められています。そのとき「頭」になった人のコンディションによっては、「今日はちょっと高い音・低い音が出る」という時もありますし、年齢によっても、出る音の高さが違ったりします。もちろん、普段から決まった音やテンポに合わせる訓練を積んでいます。法要の時に、キーボードの鍵盤をたたいて音合わせするわけにはいきません。

乱暴な言葉使いになりますが、いわば「出たとこ勝負」で、そのときの「頭」の出した声の高さとスピードを守って、これに合わせて「助」の人たちは唱える。本来なら規定の音(例えば「ラ」)で始めなければいけないところ、それより低い音(例えば「ソ」)で始まったとしても、合唱する「助」の人たちさえ、その高さについていけば、問題は起こりません。「声明」はみんな合わせて唱えるものですが、音が高くなったら高いまま、低くなったら低いままついていきます。

一番若い人のコンディションに合わせて唱えられるのである。一方、若い人が気力体力充実のあまり、とてつもなく高いキーで始めてしまったら、どうなるのか。

みんな、そのキーに合わせてます。私が知る限り、そういうことが起こったことはあまりありませんが、「とてもついていけないほど高い」となると、1オクターブ下げることになると思います。何より「声明」は、個々人が他者に合わせるということが優先されます。それによって成り立っているものだから。

さらに踏み込んで申しますと、かりに音が多少ずれたとしても、それで咎められることはありません。みんな一所懸命に、仏さまへの供養を願ってやっていることですから、音のずれそれ自体を、目くじら立てる問題とはされません。

先にも申しましたが、「合わせるための合わない間合い」、そういう「遊び」の部分に吸収されるところもあって、その「合わない」ところが、音の「波のうねり」ようにも聴こえたりもします。ぴったり完璧に合っているときよりも、不思議なことに、多少ずれている時の方が、自分たちの鼓動のリズムに合っているような気がする。それぞれ、自分が唱えやすいように唱えていることが、微妙な「ずれ」や「うねり」を生んで、逆にみんなの気持ち結びつける、そんなふうに感じることがあります。

他者に寄り添い、合わせようという不退の決意の突き抜けたところ、そこに生じる余儀なき「合わなさ」は、全体主義の「一致」とは対極の、個人主義の「同期」に近いものをつくりだすのだろう。

「頭」とは言うなれば「マスター・オブ・声明」だ。「助」を付き従わせる、高い位の僧侶の役割なのだろうか。

いえいえ、そうことはありません。

立場や年齢、キャリアに関係なく、誰でも「頭」になる可能性があります。1つの法要ごとに、「声明」を唱えるお経は決まっています。数も10曲、20曲ということが「ざら」にあります。その数あるお経の中には、ものすごく高いキーで唱えるものあれば、とても低いキーのものもある。いくら「出たとこ勝負」といっても無軌道ではないし、準備は万全に行わねばなりません。

お経によって「頭」の割り当てに規定があつて、その日に法要を勤める僧侶が誰々と決まると、キーの一番高いこのお経の「頭」はメンバーの中で一番年の下の人、このお経の「頭」は立場が一番高い人、これは一番の年長者が「頭」になる、というふうにお経ごとに「頭」の担当も事前に決まることとなります。

法要への参加が決まれば、どの「声明」で「頭」になるかも自動的に決定する。個人個人で、事前に心構えや練習ができる仕組みになっているのか。これが「準備は万全」という言葉に繋がるのだろうか、それでも当日のコンディションによっては……。

ええ、そうですね。こればかりはどうにもならない、ということはありませんから。「頭」になった若い人でも、決められた高い音が出る、そういうことも起こります。

それでも「助」は「頭」の出した音についていく。「頭」が最年少者なら、そのときの長谷の豊山の「声明」は、年長者であれ立場の高い人であれ、

「声明は修行の一部です」

それにしても、1つの法要で多いときは25曲ほど。一曲の「楽譜」も複雑な記号や文字に満ちている。さらには、重要な部分は口伝なのだ。これを全部覚えなないと「声明」を唱えることはできないのか。

暗記は必要ありません。かりに暗記できなくても、譜を見て唱えなければなりません。仏さまの前での法要ですから、間違えなければいけません。まあ、ほとんど覚えてはいますから見る必要もなくて、例えば途中でページが飛んじやっても、唱えることはできます。ただ、譜を目で追っていくことで、より集中できることは間違いないと思います。「声明」は気を散らして唱えてはならないのです。

真言宗で中興の祖と仰ぐ興教大師覚鑿(1095-1143)上人の著作『密厳院発露懺悔文』の中に、修行の足りない僧侶の姿として「仏を観念するときは攀念を発し、経を誦する時は文句を錯まる」という一節があります。「攀念」とは、「心の認識する対象が、仏以外のさまざまなものに移り変わって、集中しないこと」を意味します。長谷寺では毎日、自分への戒めとして『密厳院発露懺悔文』を唱えております。声明でも「攀念」が入らないように譜に集中して、ひたすら一所懸命に唱えます。これは私ども真言宗だけでなく、すべての宗派に共通する考え方だと思います。「声明」は経を唱えるわけで、お経というのはお釈迦さまの教えが記されているわけですから、言うなれば「説法」の再現です。一字たりとも間違いがあつてはなりません。

そうか。「声明」とは、仏の教えの再現なのだ！

ええ。メロディがきれいですねと言われることもあり、私どもも

同様に思いますが、メロディがきれいなのも、根底に信仰心・お祈りする気持があるからなのだろうと考えています。もちろん、音や旋律は大切なので、学生さんに「声明」を指導するときには厳しく指導しますが、より以上に、若い人たちの仏さまと向き合う姿勢や気持ちの大事にしたいと思っています。

師から弟子への伝承を、仏教用語では「瀉瓶(しゃびょう)(写瓶)」と言います。あちらの瓶からこちらの瓶に、水を一滴も溢さず、残さず移すという意味です。何をもう変えず、足しも引きもしないで、そのまま引き継ぐことが大原則です。「声明」の伝承も、音や旋律だけじゃなく、師のお人柄や仏さまへの向き合い方、そういうものの全てを一滴も溢さず伝えさせていただく、ということなのだと思います。私どもにとっては音の高さや旋律は、「声明」の一つの側面で、「声明」自体が、日々の修行の一部なのです。一方で、声明への音楽的関心から、例えば五線譜に起こしていただくことがあります。私たちにはどうしていきなりということですから、とてもありがたいことだと感謝しております。

環境がつくりだす音

ところで、ひとくちに「声明」といっても、お寺によって多様多彩である。お経が違えば、「声明」が違うのは当然だが、では同じ譜面を使えば、同じ「声明」が再現できるのだろうか。それとも譜面の読み方あるいはお経の解釈自体によって唱法が変わり、違った流(派)の「声明」になるのだろうか。

先の『文化財データベース』で見たように、長谷寺に伝わる「新義豊山

声明」は現存する「真言声明」三流の一つで、「新義智山声明」とともに根来山の「新義(真言)声明」を前身とする。詳細は不明のようだが、前身・根来山の「新義声明」は、高野山に伝承されている声明を用いていたという。一般にいう「豊山声明」は、空海以来の伝承に忠実で、その本来の姿を保っていると言われているが、では高野山の「声明」と長谷寺の「声明」は同じものと考えてよいのだろうか。

雑な言い方になりますが、9世紀初頭、弘法大師(空海)が、唐の時代の中国から、仏教に関するさまざまな事物をお持ち帰りになった。そこには仏典などの書物もあれば、音楽(今日の「声明」)も含まれていました。現在の「声明」がそこから始まっていることは確かだと思いますが、最初期に伝わったもの(梵唄等の音楽)と、今日の声明が同じものと言えるかというと、なかなかそうは言い切れないと思います。「豊山声明」が弘法大師以来の伝承を守っていると評価していただくのはありがたいことですが、「音」というものは、伝わっていく環境や場所によって、変化していくものだと思います。お尋ねにもあった高野山は、真言宗で最も有名なお寺の一つで、私ども長谷寺と共通して、「四智梵語」というお経を、根本の経典に据えられています。この同じお経を「声明」で唱えるとき、使う譜面も同じなのですが、今日伝わっている「音」は、高野山と当山では、まったく違ってきます。

最初のところ、少しだけ、やってみましょうか。

まず、高野山の「四智梵語」の声明。

♪(…小さく・低い声/柔らかく/静かに包み込む感じ…)

これが、当山長谷寺にいくと、どうなるか。

♪(…大きく・力強く響き渡る声/張りがあって/下から揺さぶり上げる感じ…)

全く違って聞こえるでしょう。譜面は、同じなんですよ。

こうも違うものなのか!

ご存じのように、高野山は、和歌山県の雄大な山に囲まれ、標高約900メートルのところにあります。重要なことは、高野山は今でも弘法大師がご入定されている、静かに禅定に耽つていらつしやる、伝承というより宗教上の真実があります。そういう中で修行をなさっている方々は、お大師様のご修行や禅定を妨げないように、低め低めの声で「声明」を唱えるのです。鳴り物も、静かに静かに奏でられます。

そういう高野山の環境で唱えられた「四智梵語」の「声明」がこの長谷寺に来ると、こちらは開かれた山のところに、やはり開かれた大きなお堂があつて、そこに身の丈10メートルを超える観音様がいらつしやる。そういう広いところで、大きな仏さまに向かって唱えますから、自然に声も大きくなって、強く張り上げるようになります。

さらに、この長谷寺は西国三十三所巡礼の第八番札所になっていて、昔から参詣される方の多いところ。観音さまを拜みに、ひっそりなしに人で賑わう。私たちも、その皆さんのお祈りが成就するように、一層力を込めて祈り続ける。唱える声も、大きく・高く・長くなります。

真言宗も天台宗も「四智梵語」を唱えますが、梵語(サンスクリット語)の「読み方」には違いがあります。例えば、私ども(真言宗)

が「キヤラマ」と唱えるところを、天台宗では「ゲルマ」と唱えていらつしやいます。旋律の違いも大きくて、もつとずつと長くて、ゆつたりしたものになっています。比叡山という環境に溶け込むかたちになっているのだと思います。

宗派の違いよりも、お寺の置かれた環境がその「音(声)」をつくっていくところが大きいように感じています。

声明と転読

信心が足りないせいなのか、私が「声明」に出会う前は、ほぼお寺の外である。たいていは伝統芸能として扱われ「○○声明を楽しむ」とか「△△声明の調べ」のタイトルで、「転読」とセットになっていることが多い。市販のCDやDVDも同様である。

私どもが「転読」で唱えるのは、多くの場合『大般若経』ですが、このお経は全部で600巻あります。これを、一巻全てを通読する「真読」の方法で全部を読むと、1時間で1巻読めたとしても、600時間、不眠不休で25日かかる。かなり時間がかかります。それで60巻ずつを10人で読むとか、20人で30巻ずつ読むといった方法があるのですが、それでも相当時間を要します。その間、他の修行がおろそかになりかねない。そこで「転読」という工夫が考案されて、もともとと経典の多くは巻子に仕立てられていましたから、開いて左の方にスルスルスと送っていき、同時に右で巻き取っていく。書かれている経文を読むというより、次々に目に収めていく感じですね。起源にはさまざまな説がありますが、真言宗の場合でいうと、鎌倉時代には、すでに広く行われていたと言われています。

この宗派を庇護していただいた高い身分の方々、自邸に僧侶を招いて読経されることがよくありました。お立場上、四六時中お経を読んでいるわけにはいかない。本来「真説」が正しいあり方だろうと思いますが、昔から経典や経文は見るだけで功德があるとされてきましたから、限られた時間の中で、一定の効験が現れる手法として用いられたのだろうと思います。

今の経典は蛇腹のかたち折りたたまれていますので、転がすのではなく、空中で「ぱあ」と開くようにするやり方を「転説」と言っています。経典がパラパラとめくれていくと、風が起きます。その風にあたるだけで御利益があると考えて、わざと風を起こしたりもします。それを20〜30人規模でやると、堂内に風が吹き渡る感じになって、さらに経文が大きく翻り、功德が広がっていく。そういう意味では、一種のデモンストレーションの効果も加わっているのかなという感じもします。

なるほど。その「転説」という読経のスタイルと「声明」とが合わさって、「転説会」と呼ばれる一つの法要が構成されているということか。

いえいえ、そうではありません。巻物の時代も今日のかたちの経典でも、「転説」は「真説」に対するもので、「声明」に関わるものではありません。

今日私たちが「声明」と言っているのは、経文に旋律(メロディ)を付けて唱える場合のものを指しています。さらに言えば、『大般若経転説』は読経とも言えません。唱えるのは経文ではなく各経題(タイトル)と、経文のほんの一部だけです。「七五三」と言いまして、各巻の最初の七行・真ん中の五行・最後の三行です。

沈めながら、同時に声も引き下ろすように低くして…ううう、
へ…くつきりと音を区切って…うっ・うっ・うっ。

これは空中を舞っていた雲雀が、「がーっ」と急降下してきて、着地で勢い余って「おとと」という情景を「声」で表現したものです。

仏さまを『散華』法要の場に来ていただくに際して、まず、それにふさわしい場の想定がなされる。それが見渡す限り花の咲き誇る草原で、空を飛んでいる雲雀も、我を忘れて飛び降りてくるぐらい美しいところ、これぞ仏をお招きするに値する場所だということを、発声の方法——だけで伝えようとしているのである。

『散華』の「雲雀返し」を唱えていると、「声明」というのは、文字や言葉の限界を「声」で補って、理想の仏の世界をこの地上に現出させるための、古くからの工夫ではなかったかと思われてなりません。

「声明の先には仏さまがおられます」

さて、法要での——あえて言うなら本来の——「声明」と劇場やコンサートホールでの——あえて言うならイベントとしての——「声明」では、やる側として、どこかに屈託を覚えることはないのだろうか。

普段の生活の中の「声明」とは違ってお客さんと向き合う、そういう状況の違いはありますが、気持ちの上での違いはありません。私どもが常に心に刻んでいるのは、青木融光(1891-1985)大僧止のお言葉です。

青木大僧止は、「声明が人格化」されたとも賞されて、「文化財」の指定もお受けになりました(1978年)。昭和41年(1966)年

それを「声明」とは言わないのか。
言わないですね。

「声明」とはもともとはインドの学問の一分野を指しましたが、今私どもが一般に「声明」と言っているのは、先に申しましたように、旋律を付けて経文を唱えることです。「転説」や「真説」という、お経の全部を読むか部分的に読むかといった範疇にあるものではありません。

声明は「略説法」の一種ではないのです。旋律を加えてお経を唱える、これが「声明」です。例えば『般若心経』を唱えるときも、「佛説摩訶般若波羅密多心経観自在菩薩…」と一定の抑揚はつきますが、基本的に一文字単位で読み進めるものなので(この抑揚は)旋律とは言えません。これを「声明」と言うことはありません。

なるほど。では、お経を旋律に乗せて唱えるという、その「声明」の意味は何なのだろう。仏さまに聴いていただきやすいようにするためか、あるいは唱える者の気持ちを、音(声)で加えるということだろうか。

ええ、そうですね。確かに、唱えているその時の気持ちや、「声明」の旋律に乗るといことは、経験的にもありますね。

うまくご説明できる例かどうかわかりませんが、「声明」に『散華』という曲がありまして、その中で「雲雀返し」と言われる独特の発声方法が出てきます。何か剣術の世界にありそうな名称ですが、こういう感じの発声です。

♪(へ…声を身体で引くようにして…ううう、へ…前後の姿勢を崩さない程度に、身体で上下の円を描くように高く伸び上がり、体勢に合わせて高く・大きくし…ううう、へ一気に体を

に、東京の国立劇場の柿落(ちり)として、真言宗豊山派が舞台で「声明」をやってほしいという依頼がありました。宗派の一部からは『声明』は法要だ。観客に見せるものではない」という強硬な反対意見も出されたようです。

そのとき大僧止は「仏は、それぞれの人間のうちに存在する。そして声明に触れることは、また仏法に触れることでもある。声明は寺院で唱えようが、劇場であろうが、街頭であろうが、その本質はいささかも損なわれない」とおっしゃって、自ら先頭に立ってご出演なさいました。観てくださったお客さんそれぞれの心の中にも仏さまはおられるのではないかと、どこで・誰に対して唱えようが、仏さまに祈っていることに変わりはない、私どももこのような大僧止のお考えを、それぞれに咀嚼して引き継がせていただいております。

目の前に木造の仏さまがいらっしやる。曼荼羅の中にも掛け軸の中にも、やはり仏さまはいらっしやる。この世は仏さまに満ちあふれているのだから、劇場に来る人の心にも、仏さまはいらっしやるはずだ。どこで唱えようと、豊山の「声明」は豊山の「声明」なのだ、と。私どもは、この大僧止のお言葉を拠りどころにしております。

ここにおいて、観音さまへの祈りは観音さまを通したすべての仏への祈りという、最初のお話しに接続するのだ。長谷寺での「声明」は、「長谷の観音さま」にだけ向けられているのではないのである。

このお山には、さまざまなどころに仏さまがいらっしやいます。満ち満ちていると申してよろしいでしょう。私どもは「声明」も含めどの法会に際しましても、その諸仏のご代表として十二面観音さまに手を合わせています。

気持ちの上では、お祈りを向けるところは、この長谷のお山の仏さまだけではありません。日本国中、世界中、この世のありとあらゆるところというようになります。

私も現在は、新型コロナウイルスの一刻も早い収束を願い、日夜お祈りしておりますが、どの地域・どの国のということではありません。本来なら、普くこの世のすべてに手を合わせたいところ、お山の御本尊にお祈り先を代表していただいております。真言宗の思想では、世界の中心（深奥）におられるのは大日如来さまです。観音さまも大日如来の顕現（具体のあらわれ）ですし、病氣の方にはお薬師さまの姿になってその方に寄り添い、泣いている子どもがいればお地藏さまとなって駆けつける。

私も十一面観音菩薩を本尊として拝んでいます。観音さまを入り口にして、世界のありとあらゆるものに祈りをささげております。これは、私も真言宗の考えですが、しかし、どのお寺や神社でも、各々の教義にそって、本質的には、同じようなお気持ちではないかと思えます。

声明だけを切り離せない

終始一貫、徹頭徹尾「他者に寄り添う」こと。これが「長谷の音」に込められた、長谷寺の信仰の本質なのである。さだめし長谷のお山の僧侶たちは、きっと、自分のために祈ることなどないのだろう。

いえいえ、自分のためだけに祈ることを致しますよ。まわりに人がおられてお経を唱えるというのではなく、仏さまのご真言を、何千遍(回)・何万遍と唱えます。一般の目に触れることがないので、ご存知

また、一定期間の研修には、全国から50〜60名ほどの僧侶(の卵)が集まる。もちろん、その修行には「声明」も含まれる。足せば「70〜80名」という数字が「声明の伝承が危ぶまれている」事態を回避するのに十分な人数なのかどうか、私には判断できません。

ただ1つ断言出来ることは、「声明」が消えれば、「信仰」が消える」が正しければ、「信仰」が消えることがなければ、「声明」が消えることはない、「これが論理学上の真であるということだ。言い換えれば、「声明」の消長は、お寺や僧侶のサイドの「継承」の問題にあるのではなからず、われわれ側の「信仰」にかかっているのである。

(了)

【引用参考文献】

- (1) 岩田宗一『声明は音楽のふるさと』(2003)法蔵館、11頁
- (2) 同上、11頁
- (3) 織田得能『織田仏教大辞典』(1969)大蔵出版、791頁
- (4) 上巻、中村元、1975、東京書籍、以下『辞典』
- (5) 同上書、734頁
- (6) 同上、734頁
- (7) 時代錯誤、「本来より先のが入り込んでいる」東京大学教養学部歴史学部会編『東大連続講義 歴史学の思考法』(2020)岩波書店、190頁
- (8) 引用元：<https://kuni-shi-tei.bunka.go.jp/heritage/detail/1313/136>



なかじま・けいすけ
奈良県立大学ユーラシア研究センター特任准教授／副センター長。主な著作として、『勅語玄義』に見る奇妙なナショナルリズム』東洋大学井上円了研究センター編『論集 井上円了』(2019)教育評論社、「地域経営の視点から見た『平城遷都一三〇〇年祭』』『都市問題研究』第60巻11号(2008)、「もう一つの観光資源論」『日本観光研究学会研究発表論文集 No.29』(2014)、「井上円了の国家構想」『東洋大学井上円了研究センター年報 vol.26』(2018)、「南貞助論—日本の近代観光政策を發明した男」『日本観光研究学会研究発表論文集 No.34』(2019)など。

の方はそう多くないと思いますが、これも私どもの修行の1つです。長谷寺の僧が自分のためにだけ祈っている。何を祈るのだろうか。

みなさんと同じです。「このような自分になりたく」という祈願です。自分が僧侶として、もっと心が研ぎ澄まされるように、より仏さまのお側にいけるように、簡単に言えばそういうお祈りです。私どもが僧侶を志した(発心)のは、真言宗で言う「即身成仏」を求めていることです。これは一般にイメージされるような「木乃伊」になるという意味ではなくて、根底には仏さまのような行いで、仏様のようなお言葉で、できるかぎり仏さまのようなお心でありたいという願いです。

自分も、そのような意味での「即身成仏」に近づけますように、あるいはそういう心構えを確かにするための訓練、いわば僧侶としての心の鍛錬と考えていただいた方が良いでしょう。

自分のために祈ることも、読経も、「声明」も、僧侶の修行の一部にすぎません。これだけでは修行にはなりません。日々のお掃除や雑巾がけ、お花を綺麗に活けること、そして経を読み、経を梵字で書写し、「声明」を唱える。これらはどれもが大事な修行です。どれも欠けても、僧侶の生活は成り立ちません。

先にも申しましたが、「声明」は法要の一部です。お経はもちろん、お堂や法会・法要の設えと切り離せません。「声明」だけを切り離して考えることなど、私どもには、とうていできません。

現在、長谷寺には「修行僧」と呼べる僧侶が20名ほど常住されている。

【DATA】

長谷寺の声明を見聞できる。
長谷寺の声明を見聞できる。
協力 真言宗豊山派総本山豊山神楽院長谷寺
奈良県桜井市初瀬731-1 電話0744477001
インタビュー日時：2021年(令和3)5月31日、12時

コラム

本稿のはじめの方で「仏教の声明は、キリスト教の讃美歌とどこがどれほど違うのか」というQを投げかけておいた。インタビューの時は失念していたのだが、示唆に富むお話しをお伺いしたので、以下に載録する。

5年くらい前に、ザルツブルク音楽祭(オーストリア)にご招待いただき、キリスト教の教会で「声明」を唱えたことがあります。そこで聴いたミサ曲は、声の上から「フワ〜」と降ってきて神々しい感じがしました。ステンドグラスがあって、上から光が差し、いったん上がった声、光とともに降りそそいでくる。声で神の世界を表現している感じがしました。私どもは15人くらいだったのですが、いつもと同じような声の出し方をすると、石の壁で反響しすぎて、お互いの声が聞き取れなくなっていました。

お寺は基本的に木と紙の建物なので、音(声)を吸収してくれるのでしょね。それに仏さまは正面におられますので、私どもの声も水平に広がっていく。キリスト教の教会では聴衆と向き合って歌われますが、私どもの場合、檀家や信者の方は後方にいらっしゃる。そういう建物の材質や構造、祭式の設えによって、唱えるものも変わっていくのかなと。環境が違えば、「声明」も違ったかたちになったんじゃないかなと思ったりしましたね。